

令和2年 《宮城労働局管内における労働災害及び健康診断結果の概況》

1. 労働災害発生状況

(1) 死亡災害発生状況

令和2年の死亡災害は15人で、前年より2人減少した。

業種別では、製造業（5人）が最も多く、次いで建設業（3人）、陸上貨物運送事業、林業（各2人）商業、農業、清掃・と畜業（各1人）となっている。

事故型別では、「交通事故」（5人）、「激突され」（4人）、「おぼれ」「有害物等接触」（各2人）、「墜落・転落」「高温環境」（各1人）であった。

死亡者数は、過去20人前後で増減を繰り返していたが、令和2年に15人と統計を取り始めて過去最少となった。

(2) 休業4日以上之死傷災害の発生状況（震災によるものを除く。）

①概況

休業4日以上之死傷者数は長期的には減少傾向で推移してきたが、平成21年に2,078人と過去最少を記録した以降、増減を繰り返し、令和2年は2,407人となった。

②全産業における休業4日以上之死傷災害の傾向

業種別に見ると、工業的業種では、製造業464人（全体の19.4%）、建設業283人（同11.8%）、陸上貨物運送事業317人（同13.3%）となっており、第三次産業では、商業413人（同17.3%（うち小売業299人（同12.4%））、保健衛生業306人（同12.8%（うち社会福祉施設232人（同9.6%））、接客娯楽業144人（同6.0%）となっている。

主要業種別割合では、第三次産業が最も高く51.4%を占めており、次いで製造業、陸上貨物運送事業、建設業の順となっている。前年と比較すると、おおむね工業的業種で減少し、第三次産業で増加しており、特に社会福祉施設で著しく増加している。

監督署別では、仙台署管轄事業場における災害が59.9%（1,441人）を占めている。

事業場規模別では、「10人以上30人未満」の事業場が30.6%と最も多く、次いで「100人以上300人未満」が16.0%、「10人未満」が15.8%、「50人以上100人未満」15.7%の順となっている。50人未満の事業場が61.5%を占めている。

被災程度別では、休業日数「1月以上3月未満」の災害が37.2%と最も多く、次いで「2週間以上1月未満」が25.8%、「4日以上2週間未満」25.6%の順となっている。休業日数1月以上の災害の割合は48.6%である。

年齢別では、「50歳代」が26.1%と最も多く、次いで「40歳代」が20.8%、「60歳代」19.4%の順となっている。

経験年数別では、「1年以上3年未満」が20.1%と最も多く、次いで「1年未満」が18.6%、「5年以上10年未満」17.9%の順となっている。経験年数が短い者の割合が高くなっている。

事故の型別では、「転倒」が26.3%と最も多く、次いで「墜落・転落」が17.0%、「動作の反動・無理な動作」13.0%（このうち33.2%が腰痛を発症している。）、「はさまれ・巻き

込まれ」9.5%の順となっている。

起因物別では、「仮設物・建築物・構築物等」が26.3%と最も多く、次いで「動力機械等」が17.2%、「用具」8.5%の順となっている。（※「動力機械等」は、一般動力機械（食品等加工機械、ロール機等）、動力クレーン等、動力運搬機等の合計）

③新型コロナウイルス感染症のり患による労働災害発生状況

新型コロナウイルス感染症のり患による労働災害発生状況は、全業種の1.5%（37件）となった。

業種別では、社会福祉施設が18人（49%）と最も多く、次いで医療保険業が9人（24%）、教育・研究業が5人（13%）となっている。

2. 労働衛生の概要

（1）業務上疾病の発生状況

近年の業務上疾病の発生状況は、平成20年の年間213人をピークとし、その後は増減を繰り返しながら減少傾向を示している。

令和2年に発生した疾病の種類別にみると、腰痛が94件（55.0%）と最も多く、次いでその他の44件（25.7%）、熱中症が21件（12.3%）、負傷に起因する疾病（除く腰痛）が8件（4.7%）となっている。なお、その他のうち37件は新型コロナウイルス感染によるものとなっている。

腰痛は、平成29年から3年連続して減少となったが、令和2年は94件で前年の約1.4倍に増加している。

（2）定期健康診断の実施結果

有所見率は増加傾向で推移し、令和2年は63.6%となっている。

健診項目別有所見率では、血中脂質検査が36.9%と最も高く、次いで血圧、肝機能検査、血糖検査の順となっている。

業種別の有所見率では、運輸交通業、建設業、教育研究業で高率となっている。

（3）じん肺健康診断の実施結果

受診者数は、近年は3～4千人台で推移し、令和2年は3,316人であった。

令和2年の有所見率は、1.0%となっている。

（4）特殊健康診断及び指導勧奨による特殊健康診断の実施結果

令和2年の特殊健康診断の受診者数は特定化学物質が最も多く、次いで有機溶剤、電離放射線の順となっている。

有所見率は、高気圧、電離放射線、鉛、除染等電離放射線の順に高くなっている。

令和2年の指導勧奨による特殊健康診断の受診者数は、騒音が最も多く、次いで腰痛（重量物）、VDTの順となっている。有所見率は、腰痛（重量物）が最も高く、次いでVDT、振動の順となっている。